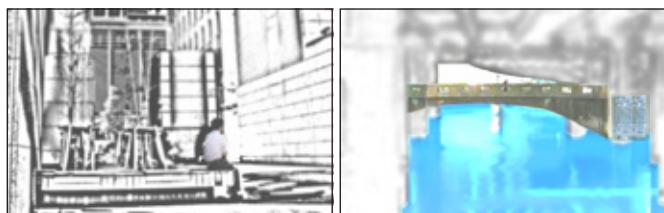


河岸食堂 — 都市空隙の別荘 —

R09039 杉田 大樹
指導教員 澤田 英行

I. 背景

約 72000 人の会社員が働く大手町。ここで働く人々は、一日の大半の時間を仕事に費やしている。彼らが食事や休憩所として利用している超高層ビル群の狭間にある空隙部分では、都市計画で生じた圧迫感のある空間が展開されている。また、大手町に添うように流れる日本橋川は、首都高速都心環状線の高架により、都市空間に埋没している現状がある。



都市空隙での食事風景

高架下にある日本橋川

II. 問題提起

超高層ビルが都市計画によって建てられてきた大手町には、都市空間の空隙部分が無数に存在する。空隙部分の大半は、公開空地として都市に還元されているが、会社員にとって必要不可欠な空間として成立しているのだろうか。都市空間の空隙（都市空隙）は、都市空間に必要な会社員のための居場所として生まれ変わる必要がある。

III. 敷地選定 / 敷地情報

古来、隅田川とともに江戸を代表する河川であった日本橋川は、水運の便が良く、河岸が周辺に点在していたことから、経済・運輸・文化の中心として栄えた。しかし戦後になると合理性を追求した超高層建築が建ち並ぶ都市空間に大手町は変貌したため、日本橋川の河岸は人々の記憶から消散していった。

近年、大手町では再開発事業が始まった。首都高速都心環状線地下化、河岸復興などの活動が積極的に行われ、日本橋川が古来のように大手町の重要なポテンシャルとして呼び醒まされようとしている。



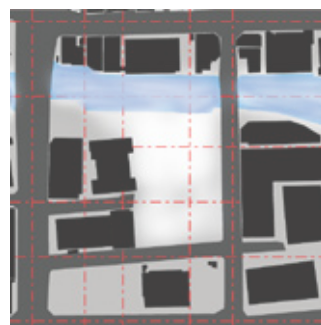
東京都千代田区大手町 面積: 15000 m²

IV. 設計提案

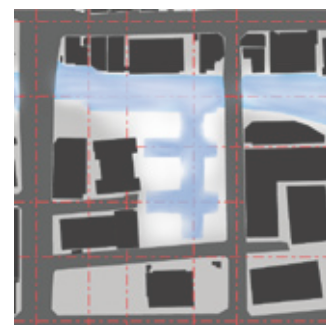
近来、首都高速都心環状線地下化により、日本橋川に生じた都市空隙から、会社員が真に憩える空間が現出される。それは海へと流れゆく日本橋川を誘引した親水空間で、会社員自身が自宅のように生活できる社員食堂である。この社員食堂は、会社員が働いているオフィス空間と機能を補完し合う存在であり、今後の都市空間に必要な建築のひとつとなる。

V. ダイアグラム

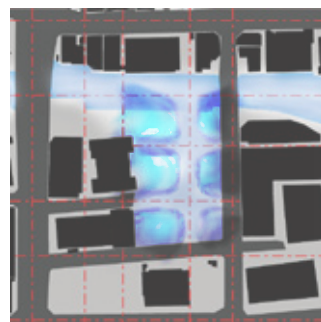
都市計画により、グリッド配置されてきた建築群。建築群の配置から都市のグリッド線を引いていく [phase1]。グリッド線上に沿うように日本橋川を都市空間に誘引する [phase2]。グリッド線から波状に親水空間の階段が伸びていく。これが河川面と地上面を繋ぐファクターとなる [phase3]。階段が面的に拡張したスラブは積層し、数多の憩いが建築空間内外で形成されていく [phase4]。



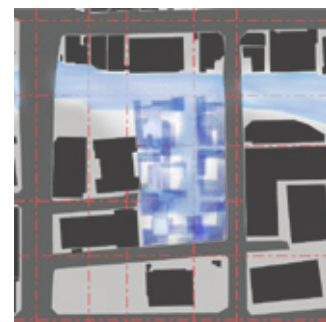
phase1



phase2



phase3

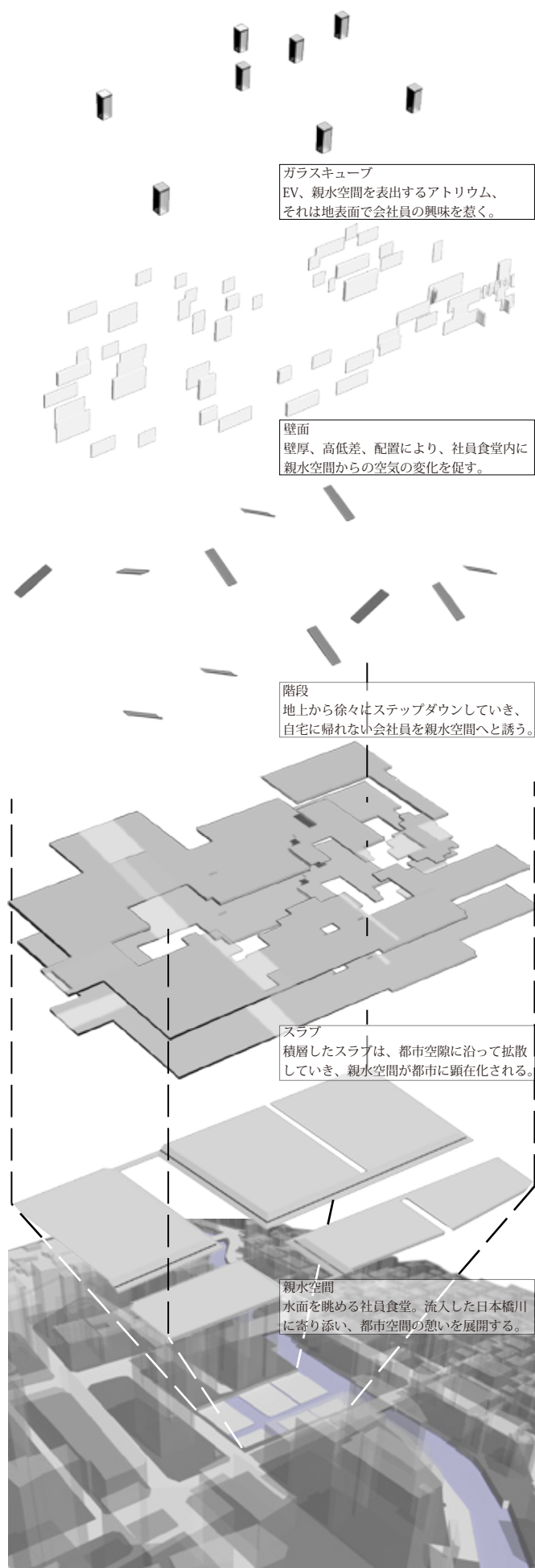


phase4

VI. プログラム

会社員が生活できる日本橋川に寄り添った社員食堂は、都市空間の会社員全員の食堂となる。出勤前、仕事合間、退社後に、都市空間に導入された親水空間で、「食」を味わいながら、うたた寝をしたり、衣服を購入したり、読書をしたりする。コミュニティキッチンやブリッジ上のベランダでは、他の企業の社員との交流を深め、都市のオフィス空間で閉ざされた企業間の隔たりをやんわりと解消していく。空間形態によって賑わいがあったり、静かな間であったり、訪れた時の気分に合わせて、自分の空間を選ぶことができる。

VII. 構成図

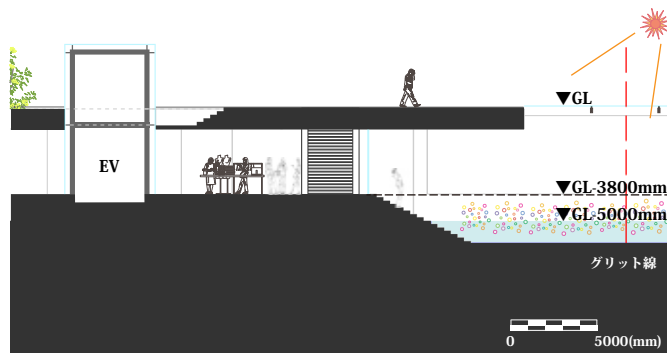


VIII. セクションイメージ



親水空間と寄り添うコミュニティキッチン [case1]

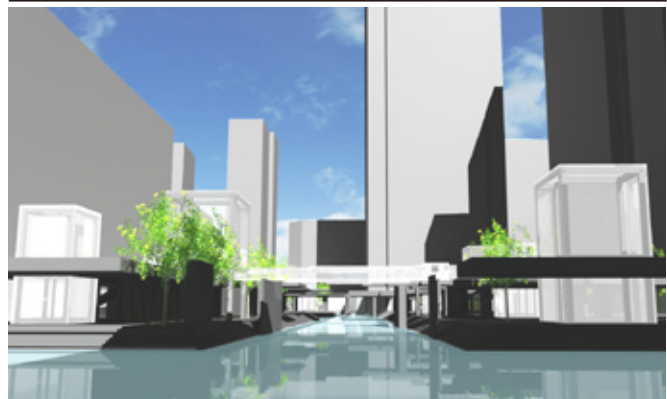
日本橋川の親水空間沿いの外部に視線が開かれたコミュニティキッチンでは、会社員が継続的に入れ替わり、「食」を通じて身分や立場など関係なく交流することができる。



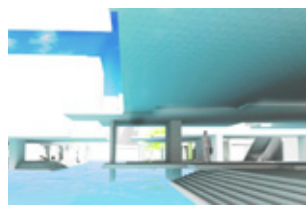
水面が煌めくブティック [case2]

トップライトから降り注ぐ日光は、日本橋川を照らしていく。仕事合間に立ち寄れる社員食堂のブティックは、ショッピングだけでなく、建築空間も楽しめる魅力がある。

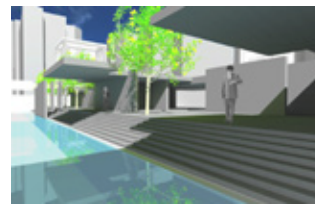
IX. パース



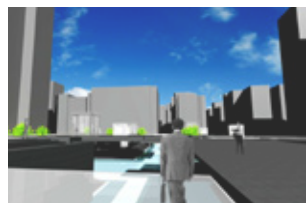
日本橋川からのファサード



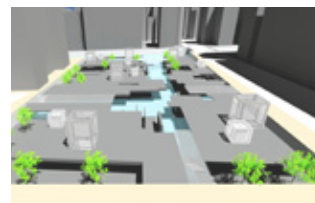
内観パース①



内観パース②



地上からの視線



鳥瞰パース

X. 参考文献

1974.03 『ポール・ルドルフの建築透視図』 A.D.A

2012.09 『至高の階段 (ディテール 9 月号別冊)』 彰国社

2012.11 『隈健吾作品集 2006-2012』 GA